遺体が血を流して殺害者を告発した話

花　田　文　男

まずカログルナンとイヴァンの体験した不思議な冒険から話をはじめよう[1]。

アーサー王の宮廷のつれづれに，カログルナンは七年以上も前のみじめな失敗に終わった冒険譚を皆の前で語る。冒険を求めて諸国を放浪するカログルナンは，ブロセリアンドの森のはずれで郷士に出会い，彼とその美しい娘に歓待される。翌朝出立したカログルナンは，遠からぬ空地で森のけものの番をする野性人のごとき巨人に出会う。冒険と不思議を求める騎士に巨人は嵐を呼ぶ，大理石よりも冷たくしかもふっとうしている泉の存在を教える。かたわらにある水盤で泉のふちの石に水をかけるとたちまち嵐が起こるという。教えられた道をたどって正午近く松の木の下にある泉につく。石に水盤の水を注ぐと，たちまち嵐が吹きすさぶ。やがて嵐がおさまり，鳥たちが松の木の枝で美しい歌をさえずりはじめる。そこに突如ひとりの怒り狂った騎士が馬に乗ってあらわれ，嵐を起こしたカログルナンに大音声で挑戦する。戦闘がはじまると，カログルナンは一撃のもとに倒され，騎士は彼の馬をうばって悠々と立ち去ってしまう。

カログルナンの話を聞き終えると，彼のいとこであるイヴァンはぜひとも恥をそそぎたいと言う。口の悪いクーに冷笑されて，イヴァンは一人で翌朝泉の冒険に出かける決心をする。カログルナンと同じような道行きをたどって，イヴァンは泉に

(1) Chrestien de Troyes, *Yvain (Le Chevalier au Lion)*, édité par T.B.W. Reid, Manchester University Press, 1952. 他に次の版を参照した。Christian von Troyes, *Der Löwenritter (Yvain)*, éd. par Wendelin Foerster, Halle, Max Niemeyer, 1887; *Le Chevalier au Lion (Yvain)*, éd. par Mario Roques, Paris, Champion, CFMA89, 1975.

ついた。石に水を注ぐと，嵐が起きて，嵐がやむと騎士があらわれる。一騎打ちがはじまる。槍がくだけると，二人は剣を取って一歩も退かずに打ち合う。ついにイヴァンは相手の頭に一撃を与え，致命傷を負わせた。

もはやこれまでと騎士は馬を駆り立て城市にむかって逃げる。跳橋が下ろされ城門がただちに開かれる。イヴァンはやみくもに追っていく(2)。いとこのカログルナンとの約束を守って恥をそそぎ，クーの無礼をとがめるためには，ぜひとも証拠を持ち帰らなくてはならなかった。二人はほとんど並んで城門をくぐる。彼らが走りこんだ街路には男も女も見かけない(3)。二人は宮殿の門まで一気に駆ける。この門の入口は狭く，二頭の馬が並んで走ることは難しい。通路にはねずみ捕りのような仕掛けがあって，それに触れると上から鋭い刃物を付けた落とし格子が真逆様に下りてくるのである。騎士は勝手知ったこの狭い通路をたくみに走り抜ける。イヴァンは後に続いて飛びこむ。いまにも騎士の鞍の後輪(しずわ)に触れそうなほど近づき，相手をとらえようと前かがみになる。このことが幸いし，仕掛けの板を踏んだために落ちてきた落とし格子はイヴァンの背中をかすめ，馬と鞍を真二つに断ち切っただけである。ついでにかかとすれすれのところで両方の拍車を切り落とした。相手はもう一つの戸口を抜け，彼の通った背後には同じように落とし格子が下りる。こうしてイヴァンは二つの戸口の間の広間に閉じこめられてしまった(4)。広間は天井に金色の鋲が打たれ，壁は見事な技と色で絵が描かれている。敵を見失い，広間に閉じこめられたイヴァンは困惑するばかりである。

するとすぐわきにある小部屋の小さな扉が開く音が聞こえ，一人の乙女が出て来てうしろで扉を閉める。イヴァンを見て乙女ははじめはとてもおどろくが，イヴァンに話しかける。乙女は騎士が致命傷を負い，奥方をはじめ臣下の者たちは悲嘆にくれていると話す。また犯人が誰なのか知っているが，悲しみと怒りがあまりにひどく，今は犯人を殺したり捕えたりするどころではないと説明する。実は乙女はイ

---

(2) 当時の騎士の物語中の習慣では逃げる敵を追うことはない。

(3) 城内に人影を見ないのは嵐のせいである（Jean Frappier, *Etude sur Yvain ou le Chevalier au Lion de Chrétien de Troyes*, Paris, SEDES, 1969, p. 30, note 1)。後にイヴァンがふたたび泉に来て嵐を巻き起こしたときにも「壁がふるえ，塔はゆれてあやうく崩れ落ちるところだ」（6542－6543行）とある。

(4) この奇妙な部屋については後に少し注釈を加える。

ヴァンを以前から見知っていた。かつて奥方の使者としてアーサー王の宮廷に使いしたとき，まだ年若の折とて振る舞うすべも知らずにいたところを，ただ一人イヴァンに声をかけられて丁重に接してくれたのだった。今そのお返しをしたいと言う。乙女はイヴァンに魔法の指輪を貸し与える。それは宝石を内にしてこぶしで握りしめていると，誰もその姿を見ることはできないのだと言う。イヴァンを寝台にすわらせ，食事を運ぶ。食事が終わると，イヴァンを探し出してすでに柩に納められた主君の仇を討とうと騎士たちが騒ぎはじめる物音が聞こえる。葬列がここを通り人々が怒りに燃えて犯人を探すだろうが，寝台にいるかぎりは決して見つからないと乙女は言う。彼女はこう言うと入って来たところから出て行く。

彼女がいなくなると，棍棒や剣を手にした多くの者たちが二つの門の前に集まる。怒り狂う彼らが見たのは門の前にある切られた馬の半身である。たしかに門の中には目指すかたきがいるに相違ない。多くの人の命をうばった例の落とし格子を上げさせそろって中に入ると，中には敷居の近くに残りの馬の半分を見つけるが，どう目をこらしてもイヴァンの姿を見つけることができない。人が通れる扉も窓もない以上，探している男はこの中にいるはずなのだ。それなのに切り落とされた拍車があるだけである。彼らはイヴァンが寝ている寝台を残して，あちこちの壁や寝台，長椅子をたたいて回る。そこに夫の死をいたむ奥方が狂乱のていであらわれる。あとに柩に納められた騎士の葬列が続く。「葬列が通りかかると，広間の真中には柩のまわりに大勢の人が集まった。あたたかい，赤い鮮血が死者の傷口からまた流れ出したのだ。これこそまぎれもなく騎士と戦い打ちまかして殺した者がこの中にまだいる確かな証拠であった」(1177－1185行)。目の前でしたたり落ちる赤い血を見て皆はあらためていたるところ探し回る。おかげでイヴァンはしたたかに打ちのめされたが，じっとして動かない。「開いた傷口のために人々はますますいきり立つ。何故血を流すのか不思議である。何に訴えてよいものかわからない。殺したやつはこの中にいるのだ。なのにその姿が見えない。不思議だ，悪魔の仕業だ」(1195－1202行）と皆は口々にののしる。奥方にとっても自分の主人を殺した殺害者，裏切り者を見つけられないのが不審である。自分の近くにいるはずの犯人を隠したのは神の仕業としか思えず，神をのろう。ここにいるのは幽霊か悪魔にちがいないと考える。そのうちにも遺体は運ばれ，埋葬される。さらに人々は精一杯殺害者を探す

が徒労に終わり，皆はあきらめて広間から立ち去る。

この後イヴァンは悲しみに沈む美しい奥方に心をうばわれ，彼を助けた侍女のリュネットのたくみな仲介によって今は未亡人となったローディーヌと結婚し，ここでこの物語の前半部は終わる。

以上が殺害者がいると遺体から血が流れる場面を中心としたクレチアン・ド・トロワの『イヴァン（獅子の騎士）』の物語の大要である。人の姿を見えなくさせる魔法の指輪についてはありきたりのおとぎ話的道具立としても，血を流して犯人を告発する死体とは何であろうか。

ここで注意されなくてはならないのは，人々が不思議に思ったのは死体が血を流したことではなく，血が流れているのにいるはずの犯人が近くに見当らないことなのである[5]。死者の傷口からあらためて血が噴き出したことは，騎士を殺した者がまだ近くにいる疑いもない「確かな証拠」（1182行）なのだ。散々に部屋中を探し回っても犯人がいないのに「開いた傷口のために人々はますますいきり立つ。何故血を流すのか不思議」（1195－97行）に思うばかりである。犯人が広間の中にいるのに見えないのはもはや「不思議，悪魔の仕業」（1201行）でしかない。奥方にいたっては殺害者を隠したのは神の仕業としか思えず，神をのろう始末である。

*

現代の人間にとっては信じがたいことだが，中世にあっては殺害者が近づくと死体が血を流すことはさして不思議なことではなかった。むしろあり得べきことであっ

(5) Lucienne Carasso-Bulow, *The Merveilleux in Chrétien de Troyes' Romances*, Genève, Droz, 1976, pp. 19－22; Christine Ferlampin-Acher, *Fées, bestes et luitons. Croyances et Merveilles dans les romans français en prose (XIIIe－XIVe siècles)*, Paris, PUF, 2002, pp. 24－25. Que li sans chauz, clers et vermaux に注して，「迷信によれば殺害者がいると死体の傷が血を流しはじめることはよく知られていた。長い時間がたってもまだ〈あたたかい〉ことにおどろいているだけである。まだ〈新鮮〉あるいは〈澄んで〉いること，つまりまだ凝固していないことは十分に不思議である」（Wendelin Foerster, *op. cit.*, p. 290, note au vers 1180）とするのはあまりに合理的な解釈にすぎる。

た。縛って水に沈める，煮えたぎる熱湯に手を入れる，灼熱の鉄を手に持つ，決闘などとならんで正当な神判（神明裁判）の一つでもあった[6]。そのいくつかの例を中世の記録からひろい上げてみることにする[7]。

クレルヴォー(Clairvaux)の修道院長であったピエール・ル・ボルニュ(Pierre le Borgne) の書簡によると，1180－1181年の間にトロワ・フォンテーヌ(Trois-Fontaines) の修道院長がある修道士によって殺された。彼が死体に近づくたびに死体から血が流れて同修道士は疑われ，他の証拠と相まって彼は審問にかけられ最後には罪を告白した[8]。

イギリスの歴史家ジロー・ド・バリ（Giraud de Barri）は次の話を記している。イギリス王ヘンリー二世は息子のリチャードに裏切られてシノン（Chinon）で憤死したと言う。というのも王が1189年7月6日に逝去して埋葬の時，リチャードがあらわれると王の遺体の鼻の穴から大量の血が流れはじめ，反逆を起こした息子がその場を離れるまで血は止まらなかったのである。ここでは父を直接手を下して殺したわけではなく，いわば精神的な殺害なのであるが，やはり死者は告発をしたことになる。

次いでトマ・ド・カンタンプレ（Thomas de Cantimpré）がドイツのプファルツハイム（Pforzheim）で1261年に起ったこととして次の事件を書き記している。老婆に売られた七歳の少女がユダヤ人たちに殺される。彼らは布にすべての血を吸い取らせ，遺体を河に投げすてる。三日後に少女は河面に手をつき出し，漁師に発見される。領主がかけつけると，少女は手を差しのばし復讐を嘆願して死ぬ。ユダ

---

(6) 神判一般について次を参照。R. バートレット『中世の神判—火審・水審・決闘』竜嵜喜助訳，尚学社，1993年。池上俊一『ロマネスク世界論』名古屋大学出版会，1999年，209－214頁。

(7) 以下の話は次の論文からの要約である。
Henri Platelle, 〈La voix du sang: le cadavre qui saigne en présence de son meurtrier〉, dans *La piété populaire au Moyen Age*, Paris, Bibliothèque Nationale, 1977, pp. 162－179.

(8) この種の話には「血の声」の表現がよく用いられる。カインが弟アベルを野原で殺した時に主の言った言葉「あなたの弟の血の声が土の中からわたしに叫んでいます」(創世記，IV，10）に由来することは明らかである（*ibid.*, p. 162, note 2)。

ヤ人たちに疑いがかかり，召喚された彼らが死体に近づくと傷口が開き血が大量に流れ出す。ユダヤ人と老婆は犯行を認め処刑される[9]。

また司教のヘリフォード（Hereford）の聖トマスが，カンタベリーの大司教による破門に対してローマ法皇に釈明するためにイタリアにいたとき，1282年に亡くなった。遺体は煮沸され，遺骨がイギリスに持ち帰られた。後の列聖化裁判の折りの証人の証言によれば，この遺骨がカンタベリー教区を通りかかったとき，血が大量に流れた。彼の迫害者，死の間接的な張本人に対する明らかな抗議のしるしである。

これらの記録が事実を伝えたものなのか伝説なのか，かならずしも分明にならないもどかしさが現代のわれわれに残るのはいたしかたない。他に証人，証拠がない場合には，出血がもしあるとすれば殺人犯を名指しする有力な証拠の一つとされたのであろう。なによりも死者，とりわけ怨みをのんで死んだ者は死後も意思をもつ存在と信じられていた。これを記録した当時の知識人はこの事実を疑っていないようだ。遺体の出血はありうることとして民間に広く流布していた信仰と思われる。とすればクレチアン・ド・トロワの『イヴァン（獅子の騎士）』で主君の死体からの流血を見た臣下たちは，その出来事自体は奇蹟，不思議とは思わなかったであろう。むしろ血が流れているのに犯人が見つからないことにおどろいているのだ。

では作者であるクレチアン・ド・トロワはどう考えていたのであろうか。下手人を見つけられずに徒労を重ねあたふたする臣下たちの様子を描く筆致からは，彼がこの出来事を真面目に信じていたとは読みとれないのであるが，それもあいまいなままである。あいまいな誓言によって神をも偽りかねないイズーの策略と同様に，一場の悲喜劇を仕立てるための格好なモチーフであったことだけがたしかである。

*

(9) この話はトマ・ド・カンタンプレと同じ材料を用いてグリムの『ドイツ伝説集』にも採用されている。ここでは船頭の同業者組合の特権の由緒を伝える形をとっている（グリム『ドイツ伝説集』上，桜沢正勝・鍛治哲郎訳，人文書院，1987年，392頁）。

物語の世界に話をもどすと，死体からの出血というモチーフを文芸作品の中で用いたのはクレチアン・ド・トロワが最初の人であるとされる[10]。彼以後多くの作品とりわけ「ブルターニュ物」と言われる作品に，このモチーフは後に見るように頻出する。ただしその前に念のため『イヴァン（獅子の騎士)』と同種の作品，翻訳のいくつかに目を通すことにする。まず中世ウェールズ語で書かれた『マビノギオン』中の同一の主題をもつ作品「オウェイン，あるいは泉の貴婦人」からみて行く[11]。この作品は『イヴァン（獅子の騎士)』とは直接の依存関係はないものの共通の起源にさかのぼるとされる[12]。万事が簡略に描写も素朴になっているが，クレチアン・ド・トロワの作品と細部を別にすれば大筋では変わらない。

クリドノの息子ケノン（カログルナンに当るが，オウェインと親戚関係にはない）の失敗談を聞き，ケイに嘲笑されたこともあってオウェインは一人で同じ道をたどる。泉を守る騎士と戦い，致命傷を与える。逃げる騎士を追って城門の前まで来る。騎士が中に入るやとたんに落とし格子が下りて，オウェインの馬は真二つに切断される。馬の後部と拍車は門の外に残り，馬の頭の部分とオウェインはかろうじて中に入ることができる。内側の門も閉まりオウェインは進むことも退くこともできない窮地におちいる。金髪の乙女が門のところへやってきて，助けを乞うオウェインに魔法の指輪をわたす。乙女は離れたところでオウェインを待つことにする。城館から人々が出てきてオウェインを捕え殺そうとするが，指輪のおかげで姿は見えない。彼らの間をすり抜けて乙女の待つところに行き，部屋に案内される。オウェインは部屋の中から外に聞こえる嘆きの声を聞く。騎士の遺体が教会に運ばれて行くのを窓から見る。その中には身も世もないほどに悲しむ泉の貴婦人の姿を見かけ，

---

(10) Brian Woledge, *Commentaire sur Yvain (le Chevalier au Lion) de Chrétien de Troyes*, tome I, Genève, Droz, 1986, pp. 104－105, note aux vers 1180 et suiv.

(11) 「オウェイン，あるいは泉の貴婦人」については次のものを参照した。*Les Mabinogion*, tome II, traduit par Joseph Loth, Genève, Slatkine Reprints, 1975; *Les Quatre Branches du Mabinogi et autres contes gallois du Moyen Age*, traduit par Pierre-Yves Lambert, Paris, Gallimard, 1993; *The Mabinogion*, traduit par Gwyn Jones and Thomas Jones, London, Dent, 1974; 『マビノギオン』中野節子訳，JULA 出版局，2000年。

(12) Jean Frappier, *op. cit.*, pp. 65－66; Pierre-Yves Lambert, *op. cit.*, p. 209.

はげしい恋心にとらわれる。

見たとおりここには拙論のテーマである殺害者がいるため遺体が血を流す場面はない。作者が省いたのであろうか。そうではなくおそらくクレチアン・ド・トロワが付け加えた場面なのであろう[13]。

人々は前後の落とし格子の間にはさまれて閉じこめられているはずの殺害者がいないのを知っておどろきあやしむばかりである。オウェインは魔法の指輪によって姿を隠したまま，いともやすやすと門の外に逃れ乙女の待つところに行く。騎士の遺体を運ぶ葬列をオウェインが見るのは乙女（ここではリネット）の部屋の窓からであって，目の当りにはしていない。事は自然に運ばれ前後に矛盾をきたさない。それに対しクレチアン・ド・トロワは遺体の出血の場面をぜひとも挿入したいばかりに，このあたりではかなり無理を重ねている。『イヴァン（獅子の騎士)』では，イヴァンは逃れる騎士を追ってまず城門（la porte de son chastel）（900－901行）を抜ける。ついで落とし格子を備えた宮殿の門（la porte del palés）（906行）に入り，そこの広間（la sale）（963行）に幽閉される。クレチアン・ド・トロワはなぜ「オウェイン，あるいは泉の貴婦人」でのように落とし格子のついた城門の中に閉じこめられるという単純な図式を選ばずに，宮殿の門の間をわざわざ幽閉の場にするという複雑な操作をしたのであろうか。単に話を引き伸ばすことを手柄にしたかったとも思われるし，彼が読んだ原典に混乱があったのかあるいは彼が誤解したのかもしれない[14]。

もともと落とし格子つきの広間という設定に無理があろう[15]。この広間は美しい天井と壁にかこまれ（964－966行），オーストリア公でさえ持たぬような豪華な寝台や長椅子が置かれているのだ（1040－1042，1135行)。しかも前後の出入口には落とし格子がつき，部屋の中を馬が駆け抜ける。『散文ランスロ』には次のような

(13) Arthur C.L. Brown, *Ywain. A Study in the Origins of Arthurian Romance*, dans *Harvard Studies and Notes in Philology and Literature*, t. 8 (1903), pp. 1－147, ici p. 127.

(14) Idris L. Foster, 〈Gereint, Owein, and Peredur〉, dans *Arthurian Literature in the Middle Ages*, éd. Roger S. Loomis, Oxford University Press, 1959, pp. 196－197.

(15) Félix Bellamy, *La Forêt de Bréchéliant*, tome I, Rennes, 1896, p. 582; B. Woledge, *op. cit.*, pp. 95－96, note aux vers 956－957.

くだりがある[16]。ランスロの異父弟エクトルはエトロワット・マルシュの城に来る。エクトルは城の中にある落とし格子（une grant porte coleiche）を下ろされて出られなくなる。城の外ではなく内側に落とし格子があるなどは見なれぬことだったので，こんな門には悪魔が加担していると彼は言う。城の内部にある落とし格子は，ここでも通常はありえないものと受けとられている。

さらにはリュネットがあらわれる小部屋とは何であろうか（970－975行）。彼女はそこから空腹のイヴァンのために食物やぶどう酒を運び（1046－1051行），人々の気配を感ずると広間から元の小部屋にひとまず退出する（1086－1088行）。人々は広間中をすき間もなく探しまわるが，リュネットの出入りする小部屋を探した形跡はない。後に城主の葬儀も終わり奥方も帰ってしまうと，ふたたび両側の落とし格子は下ろされ，イヴァンは広間に閉じこめられる（1518－1519行）。そこにまた彼を力づけるためにリュネットがあらわれる（1541行）。外部から侵入できないはずの広間なのにどこからあらわれたのであろう。リュネットだけが知る秘密の部屋からにちがいない。なぜ彼女はイヴァンをこの部屋に隠さなかったのか，あるいはこの部屋を通って安全な場所に連れて行かなかったのか不思議ではある[17]。

作者のクレチアンは地理上の正確さ[18]，建築物の現実らしさなどにはさして心をわずらわしてはいないのかもしれない。リュネットが自由に出入りする秘密の小部屋などは脇に置いて，もっぱら興味は魔法の指輪，姿の見えない囚人の探索，そしてクレチアンがはじめて文学作品に利用した死体の出血などの場面に向っている[19]。見えない相手，いるはずなのにいない敵を探す人々のなにか宙づりの状態を描くのを作者はなかば楽しんでいる。「恐れるもののない人間にとって，物も見えない人々を眺めているのは慰みでもあり楽しみでもありましょう」（1074－1076行）とイヴァンにむかってリュネットも言っている。落とし格子つきの奇妙な広間も出血の場面

---

(16) *Lancelot, Roman en prose du XIIIe siècle*, éd. par A. Micha, Genève, Droz, 1982, LXIa, 46, (tome VIII, p. 275).

(17) T.B.W. Reid, *op. cit.*, pp. 195－196.

(18) 彼は通常フランスのブルターニュにあるとされるブロセリアンド（Broceliande）（189行）の森をブリテンにあるものとしている。

(19) B. Woledge, *op. cit.*, p. 102, note aux vers 1112 et suiv.

の舞台装置として劇的効果をねらって選ばれたとすればうなずけないことではない。作者の関心は，ここでは触れなかったが，自分をもっとも憎んでいるはずの女性を愛してしまったイヴァンの苦悩，リュネットのとりなしによって夫のかたきであるイヴァンとの結婚の決意にいたる奥方の心の動きにあった。

主題を離れて細部にこだわりすぎたようだ。念のために『イヴァン（獅子の騎士)』の翻訳，翻案二つに目を通しておきたい。

ハルトマン・フォン・アウエの中世ドイツ語で書かれた『イーヴェイン』は[20]，当該の場面ではクレチアン・ド・トロワの作品のかなり忠実な翻訳と言ってもよさそうだ。城への道のりでも，イーヴェインと城主は「城門に通じる道」(burcstrâze) を抜け，「本館」(palas) に向かい，そこには「落とし格子」(slegetor) が仕掛けられていて（1075－1080行)，原文にほぼ等しい。閉じこめられたイーヴェインの前に，そばの小さな戸を開けて美しい乙女があらわれるのも同様である（1149－1154行)。『イーヴェイン』で注意を引くのは，城主のなきがらが運ばれて血を流したときに，次のような注釈がなされることである。「さて，ひとつのことが世間では絶対に信ずべきこととされている。だれかが人を殺した時，殺された者を殺した者のそばに運んで来ると，殺された者の傷は，受けてからいくら時間がたっていてもあらたに血を流すということである」(1355－1359行)。クレチアン・ド・トロワの原文にはないこの作者ハルトマンの解説は，つけ加えなければ当時のドイツの読者には容易には受け入れがたいと考えたせいであろうか[21]。

『イヴァン（獅子の騎士)』は13世紀はじめ中世北欧語に散文訳された[22]。翻案者は万事を切りつめ細部の描写や感情のこまやかさを省く傾向があるが[23]，物語の進行に関してはとくに当該の場面ではほぼクレチアンの作品をなぞっていて，ここ

---

(20) ハルトマン・フォン・アウエ『イーヴェイン』リンケ珠子訳（『ハルトマン作品集』261－409頁所収，郁文堂，1982年)。Hartman von Aue, *Iwein*, éd., G.F. Benecke et K. Lachman, 2 vol., Berlin, Walter de Gruyter, 1968.

(21) H. Platelle, art. cité, p. 91.

(22) *Erex Saga and Ívens Saga. The Old Norse Versions of Chrétien de Troyes's Erec and Yvain*, traduit par Foster W. Blaisdell Jr., and Marianne E. Kalinke, Lincoln and London, University of Nebraska Press.

(23) Phillip M.Mitchell, 〈Scandinavian Literature〉, dans *Arthurian Literature in the Middle Ages, op. cit.*, pp. 462－471, ici p. 466.

ではとりわけつけ加えることはない。

ここまでクレチアン・ド・トロワに発するかと思われる遺体からの出血という場面を，『イヴァン（獅子の騎士)』とその周辺の作品から取り上げて見てきた。このモチーフは王妃の誘拐であるとか，聖杯の探索のような大きな物語を展開するものではない。物語中の一点景として読者の興味を引くにすぎない。それでも意外性のためか，死体から鮮血がほとばしり出る一瞬の場面の印象があざやかなためか，中世文学ではなかなか好まれた主題であったようだ。というのもこのモチーフは後のアーサー王物語群とりわけ聖杯探索の物語群の中でしばしば用いられるからである。

*

まず13世紀はじめの『ペルレヴォー』を取り上げる[24]。ゴーヴァンとランスロがそれぞれ殺された騎士の埋葬に思いがけず行き会うが，結果は正反対である。

ゴーヴァンが森の中を思いに沈んで進んで行くと，猟犬が走ってきて彼に吠えかかり追いたてて行く。とうとう沼の中に立つ古びた館まで来る。見ると館の中には一人の騎士が死んで横たえられている。一人の娘が埋葬のために屍衣を手にして部屋から出て来る。ゴーヴァンが挨拶してもはかばかしい返事は得られない。「娘は死んだ騎士のかたわらに来る。傷口が開いて血を流すと思っていたのが血は流れなかった」(1546－1547行)。そこではじめて娘はゴーヴァンに歓迎の挨拶をする。騎士を殺した者ではなく，間違ってゴーヴァンを追いたててきたことで娘は猟犬をたしなめる。騎士を殺したのは誰かとたずねると，犯人は湖のランスロである，娘は殺された騎士の妹で復讐を果たさずにはおかないと答える。ゴーヴァンは長居は無用と早々にその場を立ち去る。

猟犬に追いたてられて来たゴーヴァンを兄殺しの張本人にちがいないと思ったと

---

(24) *Le Haut Livre du Graal: Perlesvaus*, éd. William A. Nitze et T. Atkinson Jenkins, 2 vol., Chicago, University of Chicago Press, 1932－1937. ゴーヴァンに関しては1530－1558行。

ころが，案に相違して死体から血は流れることはなかった。娘はゴーヴァンが無実であることを悟り，事情を明かす。ここでは犯人を確証するはずの神判がかえって潔白を証するというモチーフを逆転した語り口がめずらしい。

ついで神判にかけられるのはランスロである[25]。

ランスロはとある城を出立して蒼古とした森に入る。一日中馬に乗り，森のはずれにある墓地まで来た。夜がやってきてランスロは墓地の中に入る。ろうそくが燃え，小人が穴を掘っている。小人はランスロに悪罵をあびせるが，ランスロは答えずに通りすぎる。礼拝堂に着き馬から下りて中に入ると，一人の娘が騎士を埋葬しているのが見える。「中に入るやいなや，騎士の傷口が開き血を流した」(2816－2817行)。娘は四度大きな叫び声を上げ，ランスロに言う，「騎士殿，埋葬しているこの者をあなたが殺したのは明らかです」(2817－2819行)。そこに二人の騎士が死んだ二人の騎士の遺体を運んでくる。一人がランスロを認めて，仲間の三人の騎士を殺した不倶戴天の敵だと言う。夜が明けるまでランスロは礼拝堂にいる。礼拝堂の中では彼らを恐れる必要がないからだ[26]。翌朝出立しようとすると，墓地の二つの入口を騎士たちが見張っている。一人は倒すが，もう一人は逃げる。ランスロは倒した騎士の馬を前に追いたててその場を去る。

ランスロがそれとは知らずに通りかかった墓地での埋葬は，彼が殺した騎士のためのものであった。どうしてこのような事態になったのか，中世文学独特の挿話の絡み合いのために話が分かりにくくなっているが，それ以前の出来事に起因していた。出来事とは要約すると次のようなものである[27]。

ゴーヴァンは荒れ果てた地のみすぼらしい城にやってくる。貧しい身なりの騎士と二人の美しい娘に歓待される。そこに体に槍の穂先を刺したままの一人の騎士が広間に入ってくる。ゴーヴァンを見ると彼と知って教える。彼の話によると，ランスロが森で四人の騎士と戦っており，うち一人はすでに倒している。ランスロはゴーヴァンと間違えられたのだ。騎士たちはゴーヴァンが以前悪しきならわしをやめさ

---

(25) *Ibid.*, ll. 2803－2839.

(26) おそらく礼拝堂（chapele）は一種のアジルであろう。

(27) *Perlesvaus, op. cit.*, ll. 2528－2595.

せるために殺した騎士の一族の者であった[28]。みすぼらしい城に入ってきた騎士はランスロの助太刀をしようとしてかえって傷を受けたのだ。ゴーヴァンはただちに武具をつけ馬に乗る。血の跡をたどって急ぎ森の中に馬を走らせる。剣の打ち合う音が聞こえ，すでに一人の騎士は地に倒れている[29]。ゴーヴァンに知らせをもたらした騎士が相手をした者は瀕死の重傷を負っている。残る二人の騎士のうちの一人にゴーヴァンは打ちかかり，馬もろともに倒す。最後の一人は森に逃げる。ランスロとゴーヴァンは互いにそれと認め喜び合う。

『ペルスヴァル続編』においてもこのモチーフは用いられる[30]。

馬の歩むままに任せてゴーヴァンは進む。真夜中となり月は黒雲に隠れ，雨とあられが降り，稲妻が光る。柏の木の下に雨宿りしていると，夜明けとともにようやく空は晴れる。腕を枕に少しまどろみ，目覚めて馬に乗って行くと，美しい野原につく。正午に美しい娘が真黒ならばに乗って来るのを見る。左手には手綱，右手には象牙の角笛を持っている。娘の誘いで伴の者が用意した草上の食事を楽しんでいると，突然黒い馬に乗り，白く輝く鎧を着て，赤い盾を持つ騎士があらわれ，娘の角笛をうばう。ゴーヴァンは武器を取って彼の後を追い，はじめは丁重に角笛を返すようにたのむが，相手の拒否にあって戦いがはじまり，相手を倒す。相手はこの土地を通る多くの騎士を殺してきたマカロット・ド・パントリオン（Macarot de Pantelion）である。娘との別れぎわに五人の騎士でも恐れるに足らない指輪を贈られる。攻囲された乙女の危険を救うというかねてからの約束を忘れないようにと忠告するみにくい小人に出会うなどのことがあって，さらに進むと野原に天幕が張

---

(28) 森のはずれにある豪華な天幕でゴーヴァンは二人の美女に一夜の歓待を受けるが，翌日二人の騎士と戦うのがならわしである。二人の騎士を馬から落とし，傷を負わせる。二人の女にせき立てられたゴーヴァンは心ならずも足の裏を剣で刺して騎士たちの息の根を止める。彼らはアキレスの一族（lignage d' Achilles）（1904行）で，こうしなければ死ぬことはない（1754－1916行）。

(29) したがってこの騎士が2803行以下にあらわれる死体から血を流した騎士ということになる。

(30) *The Continuations of the Old French Perceval of Chretien de Troyes*, vol. 2, *The First Continuation*, éd, William Roach et Robert, H. Ivy, Philadelphia, American Philosophical Society, 1965 (1ère édition. 1950).

られているのを見る。一体何かと思い馬を近づけると，一里四方に聞こえるような悲嘆の叫び声を人々は上げている。その日にも殺された一人の騎士が柩に横たえられているのをゴーヴァンは見る。何者かと遺体に近づくと，「ほんのしばらくいるうちに，死者の傷口からおびただしく血があふれ出した」(2750－2752行)。ゴーヴァン以外誰一人それに気づかなかったが，彼は誰であるかを悟り，そっと天幕を抜けて立ち去る。後からかたきを討つべく四人の騎士が追ってきて戦いがはじまるが，ゴーヴァンは三人を倒し，一人を降参させる。

本文中には述べられていないが，マカロットの仲間は誰が天幕の内に入ったかを，遺体から流れる血で後にただちに知ったのであろう。またゴーヴァンは遺体からの出血を見て誰であるかを知り，天幕から逃げ出したのだから，出血の意味するところを当然のこととして知っていたにちがいない。ゴーヴァンはどこからともなくたまたまやって来て，娘の角笛を取り返し騎士を倒した後，どこへともなく去って行くありふれたしたがって原型的な図式をもつ挿話である。

同じ『ペルスヴァル続編』の一つジェルベール・ド・モントルゥユによる続編での主人公もやはりゴーヴァンである[31]。今回はゴーヴァンをかたきとねらいながら彼を愛してしまう娘，偶然に一夜の宿を借りた城での出来事，殺した騎士の父親との決闘，娘の仲介など複雑に展開する筋立てをもつ挿話となっている。

浅瀬の近くの野原の天幕に，騎士を待ちうける妖精のような乙女にゴーヴァンは迎えられる。一夜の歓楽を共にしようと言う。断わる道理はない。実は娘はゴーヴァンの寝首をかこうと待ちうけていたのであった。ゴーヴァンは自分の兄ブラン・ド・レサール（Brun de l'Essart）を殺したかたきであった。しかし寝台の下に隠したナイフが偶然ゴーヴァンの手に触れ，計略は失敗する。もはやこれまでと娘は真実を告げ，彼に危険を警告する。そこに娘のいとこ二人が来るが，一人をナイフを投げて殺し，もう一人の右のこぶしを切り落とす。娘は愛を打ち明け，二人は抱き合う。娘のすすめに従いその場を逃れようとするが，娘の二人の兄弟があらわれる。

---

(31) Gerbert de Montreuil, *La continuation de Perceval*, tomes I, II, éd., Mary Williams, Paris, Champion, (CFMA28,30), 1922－1925, et tome III, éd., Marguerite Oswald, (CFMA101), 1975, vv. 12381－13956.

娘は兄弟を説得するが，二人は聞かず戦いがはじまる。ゴーヴァンは一人の心臓を槍で突き刺し，もう一人の右腕を剣で切り落とす。さらに首尾を見に父親が送り出した二十人の騎士が来るが，ゴーヴァンは三人を倒し森に逃げこむ。残された騎士は死者を棺に入れ，娘を連れて城に向かう。娘は涙でほおをぬらすが，それは殺された兄弟のためではなく，別れ別れになったゴーヴァンのためであった。一方ゴーヴァンは森を越え谷を下ると，山の上に城を見い出す。城門まで来ると，居合わせた城主に挨拶する。城主は一夜の宿を提供する。この城に泊った者はその日に起きた出来事を話すのがならわしであった。食事が終わると，城主は皆の前でぜひとも話すように言う。ゴーヴァンははじめのうちは丁重に断るが，城主はゆずらない。やむなくゴーヴァンは一人の娘と一夜を共にし，そのいとこ二人と兄弟二人を戦いで打ち殺すか傷つけた事の次第をつつみ隠さずに語る。話を聞き終わると城主は狂わんばかりの怒りを発した。事もあろうに彼は当の娘と兄弟の父親であったのだ。剣をもってただちにゴーヴァンに打ちかかろうとするとき，棺を運ぶ者たちが城門にやって来る。人々の怒りと悲しみは頂点に達する。放心したような娘はゴーヴァンの姿を見るとひどく驚くが，少し顔に赤味がさしてくる。ゴーヴァンは人々の悲しみを眺め，人々の運ぶ棺を見つめるばかりである。「棺が戸口を越え宮殿の中に入るやいなや，死者の傷口が開き，血をふき出して床を真赤に染めた。それを見た者はおどろくが，流れる血を見て彼らを殺した者が中にいるのをたしかに知った。ゴーヴァンは血を見ると，彼が戦った当の者たちであると分った」(13295－13307行)。父親は息子の仇をすぐにも討とうとするが，今やゴーヴァンを愛するようになった娘のとりなしで一晩の猶予を与える。娘の機略で事は決闘によって決着をつけることになる。余人を遠ざけて城主とゴーヴァンは戦い，ついにゴーヴァンは父親を組み伏せる。娘があらわれてゴーヴァンに慈悲を求めたため，ゴーヴァンは父親を解放し，娘に別れの言葉をかけてその場を立ち去る。

ゴーヴァンが犯人であることは，この城のならわしによって強いられた彼自身の告白によってすでに明らかである。遺体の出血はそれを確証するもの，あるいはこの場合当然あるべき事態にすぎない。人々は流れる血にいったんはおどろくものの，すぐにその意味するところを悟る。ゴーヴァンも遺体が誰なのかをたちまち了解する。

「アーサー王物語群」の中ではもう一人が血の流れ出す遺体を目の前にする。『散文ランスロ』におけるランスロの異父弟エクトル（Hector）である[32]。

エクトルがイヴァンとサグルモール（Sagremor）と共に野原を行くと，大きな悲嘆の声を遠くに聞く。単身エクトルが近づいてみると，柩を運ぶ大勢の人を見る。やせ馬に乗りようやく皆の後について行く小人に追いつき，事情をたずねるが，小人は一言も答えない。誰かに打たれるまでは何も答えないなどと小人に嘲弄される。侮蔑の言葉に思わず手を出して小人を打ち，ようやく答えを得る。この柩には高貴な騎士の遺体が乗せられ，それは小人の知るかぎりでは，かつてシナドス（Synados）の妻を助けた時にエクトルが殺した騎士なのである。エクトルが近づくならば，争いが起こるであろうと小人は言う。誓いによって敵にうしろを見せないエクトルは小人のもとを離れ，柩の前で一同に挨拶するが，誰も答えようとはしない。「彼が通りすぎる間にも，すでに屍臭を放つ死者の傷から血が流れはじめた」（第100節，315頁）。小人は殺害者を捕えろとわめき，中の一人はその紋章からエクトルであると見てとり，彼が主人を殺したのだと叫ぶ。多勢に無勢でエクトルは窮地に立つと，一人の乙女を連れた騎士があらわれる。以前エクトルは乙女の懇願により，恥辱を受けたその騎士ラドマス（Ladomas）に代わりギナス（Guinas）と戦い，彼の恥をそそいでやったことがあった。乙女にそのむねを聞かされ，ラドマスは皆を後ろに下げる。しかしエクトルは実は自分の弟マルタイェ（Maltaillé）を殺した下手人でもあったと知りおどろく。恩を受けた人を見捨てては裏切りになると乙女に説得されたラドマスは，エクトルに手を出さぬように人々に命じ，彼を解放する。しかし小人の策略により，エクトルはまんまとラドマスとマルタイェの父親の城に誘導される。そこにマルタイェの死体を運ぶ者たちとラドマスが城に到着する。ラドマスはエクトルが城にいるのを見て困惑するが，乙女ともども父親に助命を嘆願する。年老いた父親はもはや自己の魂の救済しか念頭になく，息子の復讐を果たす気はない。ラドマスに囚人としてエクトルの身柄をあずける。

その後ラドマスは従姉妹の乞いを入れて，囚われの身となっている彼女の姉を救

---

(32) *Lancelot, Roman en prose du XIIIe siècle*, éd. Alexandre Micha, tome VIII, Genève, Droz, 1982, LXIa, §§95－111 (pp. 311－322).

うためにエクトルを解放する[33]。

ここでも死体の血が流れたことによってエクトルがはじめてその殺害者であると判明するわけではない。すでに小人によってエクトルは犯人と目されていたし，争いに加わってエクトルの紋章を見知っていた者の証言によってその事実はますます明白になる。血が流れ出したのは当然の成り行きであって，まわりの者もおどろく様子は見せない。

アーサー王物語群の中にあって，殺害者が近づくと血を流す遺体の挿話を五つ引いた。どういうものかゴーヴァンにこの試練を受ける例が多い。アーサー王物語の中の登場人物としてはもっとも古く，もっとも自由に冒険を求めうる人物であるせいなのか，後考をまたなくてはならない。ともかくも長短の別はあれ，いずれも同工異曲の筋立と言えば言える。主人公は冒険を求める旅の途次，やむをえずか人を助けるためにか敵と戦い，打ち殺す。その後，わざわざ敵の前に出向くことは当然ありえないから，これまた偶然に自分の殺した者の遺体に近づき，その出血から主人公が殺害者であることが知れる。その間に告発者か救済者として若い女性が登場するのも一様である。ただし出血が犯人と断ずる決め手になることはなく，他の証拠，証言がこれに伴う。出血のみによって犯人と名指しすることはさすがにはばかられたようだ。後は犯人とされた主人公がどうやって危地を脱するかに興味が移る。ある時は戦いによって決着をつけ，ある時には愛や恩義のために許される。何分にも犯人と名指しされるのは円卓の騎士であるから，ここで主人公が殺されるわけには行かない。反対に以上の例からは悪人，裏切り者がこの一種の神判を受けて，悪業が露見するという例がないのは不思議な気がする。クレチアン・ド・トロワによって先例がすでに確立してしまったからであろうか。

*

アーサー王物語群にあらわれる死体の出血の場面は，すべてではないにしても以上でほぼつくされているはずである。以下にはその他の作品での出血のエピソード

(33) *Ibid.*, LXVa, §§1－4 (pp. 393－395).

を二つばかり記してみる。まず中世ドイツ語で書かれた『ニーベルゲンの歌』では遺体の出血がひとつのクライマックスをなしている[34]。ただしこのような神判は13世紀以前のドイツでは行われた形跡はなく，ハルトマン・ファン・アウエの『イーヴェイン』ではじめて言及されたらしい[35]。

英雄ジーフリトはハゲネの計略によって謀殺される。殺害を容認したグンテル王と張本人のハゲネは何食わぬ顔でジーフリトの葬儀に参列し，ジーフリトの妻クリエムヒルトにくやみを述べる。殺害を暗にとがめるクリエムヒルトの言葉を二人は頑強に否定するが，「身に覚えがないといわれる方は，それを証明して下さい。みんなの眼の前で，柩のそばへ寄ってみせていただきましょう。そうすればすぐに事の真偽が判明するのだから」(1043詩節) とクリエムヒルトは二人に迫る。「これはまことに不思議なことであるが，今でも度々その例が見られる。殺人の下手人が死骸のそばへ寄ると，傷口からまた血が流れ出るのである。この場合にも同じ事が起こり，殺人の罪はハゲネにあることが分明となったのだ」(1044詩節) と作者の説明が加わる[36]。そして実際に「傷口は殺害の時のように盛んに血を噴き出した」(1045詩節)。ここでもはたして遺体ははっきりと殺害者を指名した。ただしこの事はクリエムヒルトの直観を公衆の面前で確証したにすぎない。なぜならばクリエムヒルトの直観には次のような出来事が先行していたからである。

すでにハゲネは，戦いの中でジーフリトを守るためという口実で策略を用いてクリエムヒルトからジーフリトの急所を聞き出している (897詩節)。夫の身を案じ，ハゲネの信実に頼って，クリエムヒルトは夫のからだの秘密を彼にもらす。ジーフリトはかつて竜を退治した折り，全身に竜の血を浴びて不死身のからだとなったのだが，その時両方の肩の骨の間に一枚の菩提樹の葉が落ちて血を浴びることがなかった。その場所こそジーフリトの急所なのだ (899，902詩節)。その上ジーフリトの衣裳の上に急所を示す十字の印を縫いつけることまでした。戦いがあるというのは，

---

(34) 『ニーベルゲンの歌』前編，相良守峯訳，岩波文庫，1975年。

(35) Ernest Tonnelat, *La Chanson des Nibelungen. Etude sur la composition et la formation du poème épique*, Paris, Les Belles Lettres, 1926, p. 91.

(36) 13世紀のドイツの聴衆にとってこの神判はなじみがうすく，作者はわざわざ説明の労をとる必要を感じていたようである (*ibid.*)。

ジーフリトの急所を聞き出すためのハゲネが仕組んだ虚報にすぎず，一行はあらためて狩りに行くことにする。これを聞いてクリエムヒルトはハゲネに打ち明けた急所のことを思い出す。彼女は二ひきの猪がジーフリトを野原で追いかけ草花を朱に染めている夢，二つの山がジーフリトの上に崩れかかる夢を夫に告げて，狩りに行くのを止めようとするが無駄である。狩りはジーフリトの手柄を目立たせるばかりである。その上でさらにジーフリトにのどの渇きを覚えさせるようにし，連れ出された泉のふちに身をかがめる無防備のジーフリトの十字の印を目がけて，ハゲネの槍は突き刺された（981詩節）。

ジーフリトの遺体はクリエムヒルトの寝室の前に運ばれる。翌朝一人の騎士の死骸が戸口の前にあると侍臣に聞かされて，クリエムヒルトは「それが夫であることを，彼女が確かめるに先立って，彼の身をどうして護ったらよいかというハゲネの問いを彼女は思い出した」（1008詩節）。異国の武士でもありますまいかという侍臣の言葉にも，「これは私のいとしい夫，ジーフリト様だ。プリュンヒルトが企らんで，ハゲネのした仕業です」（1010詩節）と遺体を確かめる前にクリエムヒルトは，遺体が誰であるか，その殺害者は誰であるかを見通していた。

さらにさかのぼれば，クリエムヒルトは飼っていた鷹が二羽の鷲に引き裂かれる夢を結婚前にみたことがあった。母ウオテの夢解きによれば，それはクリエムヒルトが結婚すればじきに夫を失うことを意味していた（13－14詩節）。

そもそもこの悲劇は，クリエムヒルトとグンテル王の妃プリュンヒルトのいさかいに端を発していた。プリュンヒルトにとってはジーフリトは王に対して臣従の礼を取った臣下とみなされていたし，クリエムヒルトにとってはプリュンヒルトはグンテル王との結婚前にジーフリトと臥所を共にした者にすぎなかった。これらはジーフリトがグンテル王を難儀から救うための計略から出たものであって，いずれも事実に反することではあった。しかし二人の王妃の誤解と誇りが抜き差しならぬ事態に追いこんでしまったのだ。

ジーフリトの急所を聞き出すためのハゲネの狡知，狩りの前夜にクリエムヒルトに訪れた夢の予告，これらすべてはクリエムヒルトにとってはジーフリトの殺害を目指していることは明らかであった。剛勇無比，竜の血を浴びて不死身となったジーフリトが尋常の手段では殺されるはずはない。物語の前半はジーフリトの謀殺の一

点に集中して展開される。ハゲネの前で遺体が血を噴き出したのはその総仕上げであろう。クリエムヒルトにとっては確実な犯人を，誰の目にも明らかにする劇的な装置であった。

死体からの出血という深刻なモチーフを笑話に取り入れた作品も登場する[37]。しかも真犯人は意外なところにいる。

羊飼いの女のもとに通う坊主マルタンは，お取り込みの最中に羊の角に突かれて死ぬ。おどろいた女は隣人のアダンの家の戸口に死体を置く。隣家の息子は家の中をうかがうかのようなこの坊主におのを打ちおろす。それを知った父親は女房に言い渡されて，死体を袋に入れてセーヌ川に投げこむ。ノジャン（Nogent）に住む漁師のベルナールと仲間のギーは朝早く漁に出て袋をつり上げる。お宝をつったと思い二人は大喜び。ギーはとりあえず家に帰り妻に報告。その間にベルナールは息子と袋を開けてみると，水でふくれあがった坊主の死体が出てくる。立ち帰ったギーに説明するが信じてもらえない。かえってベルナールが坊主を殺して宝物とすり替えたのだと難詰される。自分の分け前をよこせとギーは代官に訴えて出る。ベルナールが召喚され尋問されるが，宝物を取ってもいないし，坊主を殺してもいないと陳述する。黒白は二人の決闘によって決せられることになる。決闘の日は月曜日でノジャンの市の立つ日であり，町には近隣から多くの人が集まっている。互いに相手の非を主張して二人は戦うが，勝敗はなかなかつかず，二人は疲れ切るばかりである。そこに市で売り立てるために女が羊の群を追いたててきた。群の中には坊主を殺した羊もいる。「この太った羊がたまたま死体のそばで止まると，傷口からたちまちいきおいよく血が流れはじめた。この不思議を見ると，人々は十字を切った。羊を連れてきた女もそこに来た」(251頁)。犯人はここにいるはずだと考えた代官は決闘を停止させ，居合わせた人々すべてに死体の前を通るようにと言い渡す。しかし傷口は開かない。代官はそこで「羊の群を連れて来るようにと命ずる。すると傷は前と同じようにおびただしく血を流しはじめる。皆はおどろき入ってしまった」

(37) *Recueil général et complet des fabliaux des XIIIe et XIVe siècles*, éd. Anatole de Montaiglon et Gaston Raynaud, tome VI, Genève, Slatkine Reprints, 1975, Du sagretaig, pp. 243－254.

(252頁)。この中に殺人を犯した羊がいるにちがいないと代官は宣言し，一頭ずつ死体の前に通らせると，「彼を殺した羊が通ると，傷はたちまち開いた」(252頁)。代官は羊飼いの女に事の次第を申し述べるように命じ，女はすべてを白状する。事件に関わったアダンも言い逃れ，マルタン殿は埋葬されて，事は決着する。

村の司祭の不名誉な死をめぐって，いさかいを起こした二人の漁師の決闘，死体の出血と二つの神判が行われる。後のものは犯人の羊がたまたま通りかかった偶然によるものだが。ここで話は終わり，この先を作者は述べていないが，おそらく犯人の羊は裁判にかけられ刑に処されたことだろう。動物とて罪を逃れることはできなかった[38]。

最後に蛇足を一つつけ加える。「殺された者の遺体が殺害者が近づくと血を流すならば，溺死者の遺骸は知人がいると同様のことをする」[39]。溺死者は血を流すことによって敵を名指すのではなく，みずからの存在を主張するのである。フランスのブルターニュでは，「溺死者の遺骸を水から引き上げるとき，居合わせた人々の中に近親者の一人がいると，遺骸は鼻から血を流しはじめる」[40]とされていた。ベルギーでも同じことが起こり，また「この信仰はかつては大変強く，溺死による死者の身元を確認するために，とりわけ水中に長くいて判別不能の場合には，近親者とされる者が連れて来られた」[41]。

飛躍した事例だが，昭和5年太宰治が鎌倉海岸で心中事件を起こしたときも同様のことがあったと回想している人間がいる。亡くなった女性の遺体の確認にあたって，夫と名乗る男が立ち会うと，女性の鼻からおびただしい血が流れ出したので，警察は縁者であると信用した。昔から変死者は近親者に会うと鼻血を流すといわれているからである[42]。女性の死が睡眠薬のカルモチンの大量服用によるものだったのか，カルモチンを服用した上にさらに海に投身したものなのかは確定しがた

(38) 池上俊一『動物裁判』講談社現代新書，1990年。

(39) H. Platelle, art. cit., p. 172.

(40) Anatole Le Braz, *La légende de la mort chez les Bretons armoricains*, Paris, Champion, 1928, tome I, p. 396.

(41) Eloïse Mozzani, *Le livre des superstitions. Mythe, croyances et légendes*, Paris, Laffont, 1995, p. 1232.

(42) 長部日出雄『辻音楽師の唄』文春文庫，2003年，203頁。

い[43]。しかしここで重要なのは，死が入水によるものなのか，出血が実際にあったのかという事実の認定ではない。事件の処理にあたってもっとも身近にいた人物がそう記憶していることである。調べをつくしたわけではないが，おそらくわが国にも縁者がいると溺死者が血を流すという信仰があったのであろう。

(43) 同書，204－211頁。相馬正一『評伝太宰治』上，津軽書房，1995年，186－197頁。